

水牛通信

人はたがやす

水牛はたがやす

稲は音もなく育つ

工房訪問④ ラジオ・コメディア杉並 2

——なぜ小さなアンテナを倒すのか

九月十一日午後十時〜十一時 於荻窪ポエム

料理がすべて?

田川律 26

映画時評

鎌田慧 28

KYFM局の廃墟で柳田克さんの話を聞いた 19

音楽情報

高橋悠治 30

キリコのコリクツ 玖保キリコ 22

水牛かたより情報 25

工房訪問④

ラジオ・コメディア杉並

ラジオ・コメディア杉並

こんばんは。今日はラジオ・コメディア杉並から、全国の自由ラジオ、ミニFMの皆さんに特別番組をお送りしたいと思います。というのも、九月五日、東京港区で「KYFM放送局」というミニFMをやっている人が、電波法違反の疑いで逮捕される事件が起きました。これをきっかけにして、この問題についていろいろのことを考えたり、行動をしていこうとする動きが出はじめています。

今日も東京都杉並区阿佐ヶ谷にある小さな集会所で、私たちの連絡がとれるかぎりのラジオ局の皆さんが集まってもらって、この事件をきっかけにどんなことをしたらいいか、そもそもこの事件はなんだったんだろうかという点について、すこしだけ話をしました。

なぜ小さなアンテナを倒すのか

九月十一日午後十時〜十一時

於萩窪ポエム

そのなかで、それぞれの局が一時間の特別番組のテープをつくらう、ただ拳をふりあげるだけでなく、ラジオらしいやり方で今回の問題について考え、ひろめていこうという提案がありました。早速その提案をうけいれて、急拠、このラジオ・コメディアに各局の皆さんにあつまってもらい、特別番組をお送りすることにしました。

最初に、なにも知らない方のために、九月五日の朝日新聞で、この事件がどういうふうな報道されているかを読みますので、聞いてください。見出しは「若者に人気のミニFM局。経営者ら逮捕」、その横に「無許可で電波。関係者ら反発」という大きな記事です。

朝日新聞九月五日夕刊

若者の間でひそかな人気を呼んでいた東京都港区のミニFM放送局を、電

波法違反の疑いで自宅捜索した警視庁保安一課と三田署は四日夜、この放送局を閉局した青年ら二人を同法違反で現行犯逮捕した。郵政省関東電気通信監理局の告発を受けての摘発だが、ミニFM局は全国で三百以上にまで広がっており、新たな若者文化の拠点にもなっているだけに、愛好者らに波紋を投げかけている。

摘発されたのは、港区三田四丁目のマンションにキー局を置く「KYFM放送局」。警視庁はキー局や中継所など五カ所を自宅捜索し、アンテナなど放送機材を押収する一方この放送局を閉局した同マンション居住の貸しスタジオ経営者柳田克(31)と、この夜デイスクジョッキーを担当していた港区南麻布三丁目、志村浩二(23)を逮捕した。

調べによると、柳田は、経営していた貸しスタジオの宣伝をするため、去

年七月ごろ、貸しスタジオ事務所の一部を改造。ここに周波数八七メガヘルツ発信のミニFM放送局を開設し、毎日午後九時ごろから翌午前二時ごろまで、首都圏一帯に主としてジャズやロックなどの音楽を流していた。また、志村は、去年九月ごろから同局のデイスクジョッキーになり、毎週水曜日の番組を担当していた、という。

KYFM放送局は、キー局から一キロ離れた友人宅に中継所を設置しており、ここからさらに八四メガヘルツの周波数にして発信。受信できる地域は町田市や浦和市、横浜市など首都圏一円に及んでいた。

このミニFMの愛好リスナーは、柳田が経営する貸しスタジオを利用して、若者を中心に増えていた。リクエスト一日平均二十件ほどが寄せられていた。しかし、放送の中で「これは電波法違反だ」と広言し、デイスクジョ

ツキーの中には酒に酔って、卑わいな言葉を放送することも目立ち、取り締りを要望する声も関東電気通信監理局に届いていた。このため、監理局では八月初め警視庁に告発していた。ディスクジョッキーは一日三人ぐらいが二時間交代で担当しており、保安一課は今後、志村以外のディスクジョッキーら十数人からも事情を聴く。

電波の利用は電波法で規制されており、無線局を開設する場合は郵政大臣の免許を受けなければならないが、KYFM放送局は、無許可でかなり強い電波を出していた。

告発をした郵政省関東電気通信監理局は「ほとんどのミニFM局が許容範囲を超えて強い電波で放送し、電波の秩序を乱している」として、今回の摘発をきっかけに、本格的な取り締りに乗り出す方針だ。これに対し、ミニFM局関係者の間から「電波を市民の手

から奪おうとする弾圧だ」と、反発の声が上がっている。

ラジオ・コメディア杉並

こういう記事と逮捕された柳田君の写真、そしてこの「KYFM放送局」の内部というかたちで大きな写真がのってありますが、じつは、これはこの放送局が間借りしていた貸しスタジオの機材なんです。

今日は、この問題をきっかけにいろんな話をしたと思います。まず最初に、「これが自由ラジオだ」という本を出し、日本のあちこちで自由ラジオやミニFMをつくらうという活動をしていらっしゃる粉川哲夫さんに、少しお話をうかがってみたいと思います。お願いします。

粉川哲夫

八三年にいっぺんだけ、北海道の高校生が非常につよい出力でFM放送をやっていることがありましたが、電波管理局——いまの関東電気通信監理局が警察に告発して、警視庁が関係者の逮捕にふみきったという例はないんです。

だから、とうとうシビレを切らしてやったということなんでしょうけど、だったらなぜ今の時点でやったのか？ そのあたりのことを想像してみると、いろんな問題が出てくる。

まず第一に今回の逮捕の仕方なんですけど、いままでのやり方だと関東電気通信監理局がつよい電波をだしている局に警告を發して、それでいうことをきかなかつた場合に告発して、警察が関係者を逮捕するというのが普通だった。ところが今回は、まったく警告なしにイキナリ踏みこんできたわけでしょう？ そこから考えると、はじめ

から見せしめ的な社会効果をねらった部分がつよいんじゃないかという気がするんですよ。グリコ森永事件にしても、杉並の、いわゆる防災無線の電波ジャックにしても、警察の側には、いま電波をつかっていた反社会行為ができていたという認識があると思う。ミニFMとか自由ラジオというのは、社会を統合し管理する側から見ると、なんかわからない部分を含んでいる。だから、それをいまの時点でチェックしておくというのが一つですね。

それからもう一つ、昭和最後の日といえますかね、通称「Xデー」に向って、なにかすごいことをやってやろうという集団のなかには、たとえば非常に強力な電波で既存の放送局を占拠しようとか、あるいは妨害電波をだそうとか考えている部分がある、というふうな警察は踏んでると思うんですよ。そうした電波を利用した新しい反社会的

こんばんは。いまの状況のなかで今回の事件を考えると、あまりにも驚くべきことが多いと思えますね。つまりNTTがコンピュータのネットワークを商品化していくとか、INS利用の研究会を組織するとか、そういう動きが一方にあるわけでしょうか？ 他方、エレクトロニクス・テクノロジの自由な使い方もとめる下側からの動きというものも、すごく活性化している。そういうなかで、まさに戦前型の古いタイプのメディア弾圧の動きが出てきたんで、ちょっと意外な感じでしたんです。

ただ、ミニFMや自由ラジオの流行はもう三年以上つづいてるわけですから、その間、ミニFMと自由ラジオのなかから逮捕者を出したことはないんです。という意味では、電波管理局にしても警察にしても対応がおとなしかった。

行為に対して法律的なくさびを打っていく。それにはまず、ただ不法な無線機をもっていているというだけで家宅捜索ができるという前例をつくっておく必要があるわけですね。

すでに二年前にCB無線の法律が変わったわけですね。いま不法な出力をもっていているCB無線機を使用可能な状態で自宅にもっていると、それだけで家宅捜索の対象になります。逮捕の対象になりうるわけですね。たとえば自宅に爆弾とかピストルをかくしていると、疑いがあれば、爆発物取締り法という疑いがあれば、爆発物取締り法とか、いろんな法律によって警察は家宅捜索ができるでしょう。それと同じように、強力な無線機を自宅にかくしているという疑いがあつた場合も、自由に家宅捜索ができるように法律的先例をつくっておきたいという気持がある。今回の事件は、そういうふうに使われていくおそれがあると思います。

とくに今度の場合、関東電気通信監理局が警察に協力したというかたちが非常に印象的です。

新聞報道によると、電波管理局の人は「ミニFMをこのまま放置すれば、電波の秩序がなし崩しになる恐れが非常に、今後ともきびしい態度でのぞむ」というふうにいっているらしい。これは昔からの電波管理局の発想ですから、それほど意外なことではない。もしこれだけのことなら警告することもできるし、ほかにもいろんなやり方があると思うんです。かれらの考え方を貫徹するために、みせしめ的に逮捕するということもありうると思う。ただ、その場合、この放送局があった三田署がやればすむことです。ところが今回は、わざわざ警視庁保安一課がでてきている。つまり警視庁主導の摘発という面が非常に多いと思うんです。警視庁の狙いのほうが先行していて、

それに郵政省なり関東電気通信監理局なりがつきあったという感じ。

いま世の中は自由だというけど、一方で、おそろしい動きがふかまっているという気がしてならないんですね。たとえば、いま一部の若者——中年もふくめて——のあいだで、警察無線を趣味で聴くことがはやってるでしょう？ やっぱりラジオがつまらないせいじゃないかと思うけど、あれは電波法でゆるされていることであって、他人に情報をもらさなければ別になんでもないわけですよ。ところが、いま国会で論議されているスパイ防止法が制定されれば、もうこれはできなくなる。つまり警察は国家機密をあつかうから、その警察無線を傍受することは、あきらかにスパイ罪を構成するわけです。そうなれば当然、いま秋葉原で一萬九千円で売っているような器械は売れなくなるし、買うこともできなくなる。

他の先進産業国にくらべると一時代ずれたような状態が出現する可能性が、なきにしもあらずなんです。

それと新聞報道なんかを見ると、依然として、電波法に違反した者は犯罪人だという昔ながらの扱い方がある。でも、そんなもの、たかだか交通違反ぐらいの扱いでいいはずなんです。ところが、まるで刑事犯罪をやったような扱いでしょうか？

電波管理局は「電波の秩序がなし崩しになる」といっているわけだけど、それは国家の側がつくった秩序であって、かならずしも市民の側の秩序じゃないんです。電波はだれのものかというところを考えると、非常におかしなことになる。たとえばイタリアでは一九七六年に、「電波は市民の表現媒体である」ということが最高裁判決によって法律的に定められてしまった。イタリア共和国憲法では、これは日本の

憲法とおなじ第二十一条なんですけど、表現の自由がみとめられている。その場合、印刷物をだすとか絵をかくとか、いろいろな表現の媒体があって、電波もその一つなんです。それを自由につかうことは許されなければならぬ。とくにFMの放送帯は地域メディアです。当然、それを地域の住民が優先的につかうことは、むしろ、すすんで保障されるんじゃないかならないんです。

ところが日本では、おなじFM電波をつかった者が刑事犯罪を犯した人間のようなやり方で処罰される。これは不合理ですよ。しかも、かれらが非常に悪質な妨害をあたえていたならともかく、そんなことはまったくないわけですからね。すくなくとも先進産業国の例に照らしてみると、とても考えられない事態だと思います。

ラジオ・コメディア杉並

粉川さんは、こんど「KYFM放送局」のまわりの人たちとお会いになつたと聞いてます。実際、どういふひどやり方がされたのかということについて、すこし話していただませんか。

粉川哲夫

今回逮捕された人は技術マニアで、まず電波をだすということに興味をもっていたんですね。たまたまそこが貸しスタジオだったために、いろんなミュージシャンや近所の若者たちがあつまったりしていた。そういう両方の要素がむすびついてできあがった放送局なんです。ですから、なにか反社会的なことをやろうというような意識はまったくくない。そこにたまたまあつまつた人たちが、毎日、なんとなくきま

たパターンで放送をやっていた。DJが多いんですけど、だいたい九時か十時ごろからはじまって、翌日の二時か、場合によっては四時ぐらいに終わる。

九月四日の晩も放送をやっていたんです。そこに表の戸をあけて、いかついおじさんが入ってきた。そのとき部屋のかなには十人ぐらいの人がいたらしいんですけど、私服の刑事たちがドドッとはいってきて、たちまち部屋がいっぱいになっちゃった。

ラジオ・コメディア杉並

なんか十数人、押しかけてきたとか。
粉川哲夫

ええ。ふだんそこにあつまってる人たちとはまるで風態のちがう人たちだから、かれらがドドッと入ってきた

とき、そこにいた人かちは「こ、これはなんだ？」と、ヤクザかなにかかなというイメージをもったそうです。

で、「なんでですか？」ときいたら、警察手帳をだして、「柳田はいるか？」ときいてきた。そこにいた人たちは、自分たちは知らなかったけど、柳田さんがどこか別のところで刑事犯罪かなにかをやっている、それで逮捕しにきたのかなということまで考えたらしいです。だから、すごい入り方なんですよね。たんなる電波法違反の捜査とは思えないぐらい、ものものしいやり方で入ってきたといえます。

ラジオ・コメディア杉並

そのときテレビ・カメラも同時に入ってきたそうです。

粉川哲夫

で若干つよくなる場合もあれば、よくなる場合もありますけど。また、あえて微弱電波を超えた出力でやっているとあると思うけど、それはもうミニFMとは呼べない。むしろ「パイロット・レディオ」——海賊放送といったほうが正確なんです。今度の場合は、当事者たちも規定の微弱電波を超えているということをはっきり意識していた。ですから、あれは海賊放送であってミニFMではなかったといわざるをえないんです。したがって海賊放送が摘発されたという報道の仕方ならまだいいんですけど、ミニFMが摘発されたということになると、微弱電波でやっても摘発されるんだという含みがでてきますから、非常にまずいと思う。

ラジオ・コメディア杉並

いっとう最後にテレビ・カメラもった人が入ってきて、ライトマンがバツと明りをつけて撮影がはじまったんで、警察の記録係かなと思つたら、それがNHKだったということがあとでわかった。つまり記者クラブからきたんですね。

ラジオ・コメディア杉並

そうすると、たまたまこの「KYFM放送局」がちょっとつよく電波をだしていたからというだけのことではなく、そこにいろいろな動きが見えてくる。

それともう一つ、あたかもすべてのミニFMが——つまり国に認可されたNHKだとカTBSだとかをのぞく全放送局が無法であるかのようなニュースで、マスコミ報道がなされている

粉川さんにはのちほどまたお話いただくこととして、とりあえず今日は五つの放送局の皆さんにおあつまいただいてます。順次、お話を簡単にうかがって、その上で、もしできれば全体の討論をやってみたいと思います。口火を切るかたちで、杉並区の高円寺駅すぐ近くの喫茶店で放送をやっている「JOGG・FM高円寺」から話していただきたいと思ひます。

FM高円寺I

ぼくたちの放送局は、東京の中央線の高円寺という駅の近くでやっています。いまの粉川さんの話によると、どっちかというとパイレーツのほうなんですけど、それほどのパイレーツでもない……まあ、ミニFMとの中間ぐらいのパイレーツで……。

この問題については、ものすごく腹

ような気がするんです。そもそも電波法というのは昭和二十五年にできた、古い、カビのはえたような法律ですよね。そこに定められた許容範囲のなかで、ぼくらも放送しているわけですが、そのあたりのことを簡単に話しいただけませんか？

粉川哲夫

むかし「ミニFMか、自由ラジオか」というような議論があったと思うんです。これはまあ、それぞれのやり方の相異であって、電波の規模においては、どちらもミニであることにちがいはない。電波法で許されている微弱電波の許容範囲内でやる。その「微」が「ミニ」に当たるわけです。

だから、すくなくともミニFMという以上は合法が前提なんです。ただ厳密に測定すれば、その場その場の状態

が立っているのね。そのうち手入れがあるんじゃないかなというところは、ぼくなんか前々から思ってたし、そのときは当然警告があつて、しかるべく手順を踏んでくるんじゃないかと考えていた。だからこそ安心して、不法であることなんかハナから気にしないでやっているといるところがあつたのね。

ぼくはわりとラジオが好きで、むかしからよく聴いて、もっともといろんなラジオが欲しい、いろんなラジオが聴きたいということが、ぼくなんかはじめたラジオの基本なわけ。そういうことからいって、こういう「KYFM放送局」みたいなのが沢山とんでたほうがたのしいと思うんですよ。

それはある意味で、法をきちんと守つてやってくれる人たちに對しては失礼なことかもしれないし、そういうような態度がよけい権力の弾圧をみちひきだしているんじゃないかという考え方もあ

るかもしれないけど、ぼくらはもっと電波が自由な方向へすすんでいくようになってほしいと思う。

ラジオ・コメディア杉並

ちょっと割り込んで、ごめんなさい。FM高円寺の場合は、最初、ちゃんと認可された放送局をつくらうと思っ、いろいろ動いたり調べたりして、とてもこれでは認可されそうにないという結論になって、いまの放送をはじめたと聞いてますが……

FM高円寺2

ぼくは高校のとき、ホノルルに一年ほどいまして、そこでアメリカのFM局の事情をいろいろ見てきて、こっちに帰ってきて、いま話した局長の高橋さんと知りあって話しているうちに、

二人のあいだで、日本でもそういう放送ができればいいという意識が生まれしてきた。それが発端です。当時はまだ十代でしたから、ぼくが三十歳ぐらいになるまでのあいだに、そういう状態ができたらいねというような話をしています。

それは夢物語みたいなものであり、何百万あったらできるのかなアという多少は現実的な話もふくんでたんですけど、ちょうどそのとき「キッズ」とか、ああいうところがミニFM局というかたちで出てきたので、それをちょっとと参考にして、とりあえず、とっかかりのミニFM局をやってみようという感じではじめたということです。

ラジオ・コメディア杉並

つぎに東京都の世田谷区の、若者の街といわれていますが、下北沢で放送

局をしてらっしゃる「ラジオ・ホームラン」の方にお話をうかがいたいと思います。——いま、このマイクのまわりにあつまるために時間がかかっていますが……じゃあ、その合間に粉川さんね、たとえばヨーロッパやアメリカでは、日本よりもうすこしゆるやかなんですか、管理する側の基準というか姿勢というか……？

粉川哲夫

もうすこしゆるやかというより、ぜんぜんゆるやかなんですね。アメリカの場合、いちおう免許は必要なんですけど、主旨さえはっきりしていれば取りやすい。ただ具体的に放送のスペースがないんですよ。FM局の周波数帯に空きがないから買うしかない。つまり経営難の放送局を買って開局するか方法がないんですね。そういうふう

にして、たとえばステイビー・ワンダーなんか自分で二局ももってるんです。

ラジオ・コメディア杉並

なるほどね。そうすると日本のように、郵政省が電波を独占して「ここは認可します」「ここは認可しません」ということではなくて、とりあえず空いている周波数帯さえあれば、私たちがのような素人があつまって放送局をつくることは可能だと、そういういきっていいですか？

粉川哲夫

いいです。とくにオーストラリアの場合、こんど小さい出力のコミュニティ・ラジオの認可が下りるようになってたんですよ。つまり地域の利益にかな

えば、放送局はかなり自由につくれる。それからイタリアの場合は、これはもうほとんど自由です。ただアメリカと同じように、大きな都市ではもう空きがない。そういう現状ですね。

ラジオ・コメディア杉並

なるほどね。……ええと、今日はラジオ・ホームランの皆さんに四人きていただきましたので、今回の事件でいたいことや、あるいは自分の局の宣伝でも、ひと言ずつお話しただけませんか。すいません。あまり時間がありませんので……。

ラジオ・ホームラン1

やっぱりこんどの事件は、せいぜいスピード違反程度のことだと思っんです。だけど交通違反もみんなを管理し

たりチェックしたりする道具になっているということを、どこかで読んだんですけどね。たとえ刑罰は軽くても、もし、そういう管理される仕組みになったらしょうがないし……。電波って、ホントにだれのものでもないわけでしょ？ それを国から認可していただくっていうのはすごくオカシくて……で、今回のことを機にね、電波ってだれのものなんだという根本的なことを問題にできたらいいなと思っます。

ラジオ・ホームラン2

ええっと、ラジオ・ホームランっていうのは、この間、下北沢で一年半ぐらいた放送をつづけてきたわけです。で、港区の局が手入れされて逮捕者がたというところを、昨日まで知らない人もずいぶんいたりしてますね、もっとも

愚鈍なミニFM局なんじゃないかとか思ってたんですけど……(笑)なんかまあ、それでもつづけていくだろうと——その辺、もう一年半局に住んでいて、それが日常的になったF君なんか、どうでしょうか？

ラジオ・ホームラン3

いま自分たちでラジオやってることと、いろんな状況を分析して、まとめで考えることは、かなりレベルがちがうというのが実感なんですよね。いまの状況を分析して考えてみると、さっきから粉川さんがおっしゃってるとおりだと思われ、ミニFMとか自由ラジオが危機にさらされるわけだから、それなりのアッピールみたいなものは、ぼくらの局でも考えていかなければならないと思います。ただ、いわゆるミニFMとか自由ラジオにはいろんな側

面があるわけです。たとえば一つの場所としての機能とか、せこい話だけど人との関係とか……なんていうかなミニのレベルでの話合いだとか、ぼくら、そういった回路をすごく大切にしてきたと思うんで、それと、ぼくらが直接的になにをどうやるかという話とは、また別個の問題としてぼくは考えたいし、できることならやっぱり、こういう問題をもとめていける組織をどっかでつくって、そこでアッピールするなりなんなりしていけばいいんじゃないかなと思うんだけど……。

ラジオ・コメディア杉並

ちょっとインフォメーションの意味で教えてもらいたいんですが、ラジオ・ホームランというのは、週何日放送しているんですか？ メンバーは？

ラジオ・ホームラン2

日曜日はやっていないから、たてまえとしては六日です。夜八時ごろから日によって十時に終わったり十二時ごろまでやったりする。メンバーは、どこらへんで線を引いたらいいのかわからない状態がありまして……(笑)ううん、三十人かな、二十人かな。まあ、そこらへんはなんともいえないところですけど。

ここは荻窪の駅前にある「ボエム」という喫茶店で、そこがラジオ・コメディア杉並の放送場所になってるわけですけど、ぼくたちのラジオ・ホームランは下北沢の、いま話したF君の住居が放送局でありまして、六畳二間、電車がなくなればそこでみんな雑魚寝して翌日帰っていくという、さっきもいったけど、メンバーの日常の場にもなってるわけです。だから十日に、あ

る人から摘発うんぬんということを知ったとき、「あっ、これはうちがやられたかな！」と、「ああ、これであの場所もだめかな」と思ったんですが、幸い、うちじゃなかった(笑)。そういうふうな体制の側からわれわれの場がどんどん奪われていくような雰囲気が出てきて、だんだん暗い気持ちになりつつあるんだけど、まあ、あかるく放送はつづけたいと思います。

ラジオ・コメディア杉並

つづいて国立市にある一橋大学のなかで放送局をやっているラジオ・マーレードの皆さんに、ひと言ずつお話をうかがいたいと思いますが……あの、週に何日放送している放送局ですか？

ラジオ・マーレード1

毎週金曜日、週一回です。サークルの部屋を使ってる関係で、時間は六時から八時と、ちょっと早いですけど。こんどのは、どう受けとめていかかわからないというのが正直なところで、厳密に違反しているかどうかということになる、まあ、どんな局でも多少は違反している——あっ、違反してるという大変な方だけど、ホントは違反してるかどうかわからないと思っただけ、電波のつよさなんか計れないから。予想してなかったわけじゃないんですけど、現実にごうごういうふうな状況だと、ホントに、どういうか……

ラジオ・マーレード2

ぼくは新聞報道があったということも、五日ぐらい知らないでいたんです。

逮捕直後の(われわれの)放送でも、ぼくはいなかったんですけど、あとで聞いたところによると、そんなに話する子もいなかったと。あんまり関心が高くなかったようなんです、うちの局の場合。

まず今回の場合は出力がかなりつよかったようだと、それから内容もDJっぽい、ちょっと前のブームのミニFMみたいな感じでやってた放送局みたいで、とりあえず、われわれとはずいぶん条件がちがうのではないかと安心してしまったところがあると思うんです。とりわけ自由ラジオ派というのかな、「流行のミニFM派とはちがうんだよ」みたいなことをすごく強調していたというところがあるでしょ？ そういう点で、うちの放送局の場合も、おっきい放送局をまねしたようなところがやられるのとはちがうんじゃないか。極端にいえば、自分たちとは関係ないん

じゃないかという意識があったと思うんです。だけど、いま話をきいていて、それだけじゃまずいんじゃないかなと。

ラジオ・マーマレード3

私もそのニュースを入づてに聞いたときは、「ああ、どっかのミニFM局がつかまったのかな」ぐらいしか思っ
ていなかったんです。だけど、あとからくわしい話を聞いて、いちおう私も音楽をやってて、そのスタジオを使っ
てた関係もあって、「あの人がつかま
ったのかな」とびっくりして、それで
いきなり「これはまずいことになった
な」という気になったんです。それは
あくまで、知ってる人がつかまったと
いうことで身近かにとれたということ
なんだらうし……。いままで自分たち
がどんな番組をやるかということだけ
に汲々としてて、それが外にどうい

ふうに使えとられていくのかというこ
とが具体的にはわかっていなかったと
思うんです。そのことが、今回の、た
とえば新聞なんかにでていることを読
むと、自分たちとはぜんぜんちがうと
ころで話が流れていってしまうんだと
いうことが、よくよくわかった——と
いうことでした。

ラジオ・コメディア杉並

つづいて東京都の豊島区にあるラジ
オ・コメディア豊島の方。

ラジオ・コメディア豊島

ぼくらはラジオ・コメディア杉並が
はじまるのと一緒ぐらいに、まア、兄
弟局ということではじめました。
ぼくらの場合は他の局とはちょっと
ちがっていて、地域でいろんなことを

やってるグループがありまして、そこ
でラジオをはじめの前からピラとかミ
ニコミをだしていたわけです。それを
維持していくためにはお金が必要で、
銀行や信用金庫やデパートからもらっ
てやってたんですけど、商法改正とか
で、その種のメディアに対する制約が
でてきた。で、つぎに公園をつかって、
テンブラ油とかの家庭廃油——いらな
くなった油をあつめて石鹼をつくる運
動をやったんです。でも、その公園を
つかうということに関しても、区とい
ろんなやりとりをしなければならぬ。
ぼくら自身、いろんな人とコミュニケ
ートする媒体がほしいなと思ってやっ
てたんですけど、活字にも空間にも制
約があるということがわかってきた。
そんななかで粉川さんのラジオと出
会った。これはすげえなと、ぼくら、
非常に新鮮な思いがあったんですね。
四〇〇メートル、十五マイクロボル

トということについては、こういうい
い方があたっていかどうかはわか
ないけど、法の網の目を裏からかく
ぐるというイメージがありましたね。
完全に合法でやるとか完全に違法で
んばるんだとかいうんじゃないかと
とりあえずは、そこでぼくらのやれる
ことをやろうじゃないかと——そうい
う性質のメディアだと思ってましたか
ら、その意味では、もし制限を超えれ
ば警告があるだろう、そのときはその
ときでまた考えればいいやということ
です。だから、今回のこと
に聞しても、もしあったとしてもお
かしくないし、とうとうきたかという感
じでした。

で、それに対して、ぼくらどうする
のかということなんですけれども、ま
ア、いけるとどこまでいこうと——「言
論の自由」ということで大上段にふり
かぶって抗議行動を起こすということ

でもないしね。もしくは、さア止めよ
うということでもないしね。いまぼく
らがやってることをやりつづける。そ
のなかで横の人たちとつながりあって
いくということではないと思うんだけど、
ただ、警告なしでも今回のようなこと
が起こりうるわけだから、「救援連絡
センター」とまではいわないけれど、
いざ踏み込まれたときのぼくらなりの
対応技術の勉強はしておきたいと思っ
ています。

ラジオ・コメディア杉並

なるほどね。ええと、「水牛通信」
というすてきなミニコミがありました。
そこで「自由ラジオをみんなで作ろう
よ」と宣伝をしていた津野海太郎さん
にもきていただいています。

津野海太郎

さっきまで東京の沢山のラジオ局の
人たちがあつまって、こんどのごと
議論をしていたわけです。ぼくは直接
の当事者じゃないから、そばで坐っ
て聞いてるかたちが多かったんだけど、
そこでいちばん感じたのは、自由ラジ
オの運動には中心がでない、それが
おもしろいとこじゃないかということ
なんです。
あまりに小さいから、各地にゴマの
ように分散して存在することしかでき
ない。それを統合して巨大な出力のも
のにしてしまうと、どうしても中心が
できて、そこでつくられた情報を地方
に流していくというかたちになってし
まうでしょ？ 管理する側にとっても
中心を叩けば全部がぶれてしまうか
ら、その意味でもやりやすい。だから
センターなしでゴマみたくに分散して
るほうがいいんだと、いまラジオをや

ってる方たちには、そういう意識が
よいんだなということを感じました。

したがって今度の事件に対しても、
いままでのやり方だったら、即座に抗
議集会をもつとか統一アピールをだ
すとかするんだらうけど、みんな小
さいラジオの方法が身につけてしまっ
てるから、それはできない。でも、み
んな似たようなことをやってるわけ
ですから、お互いに共感もあるし、他人
の痛みを自分の痛みとして感じるこ
もできるわけ。だから、なんらかの共
同の動きが必要なことわかってるん
だけど、そう簡単にはまとまることが
できない。そこからへんのことを、ほく
はボジティブに解釈したい。そのこと
こそが大事なんじゃないかなと思うん
です。つまり、これから先どういふ
うに動いていくにせよ、なんらかの新
しい動き方をつくりださなくちゃいけ
ないような、そういうものをみんなが

はじめてしまったんだということだ
ね。

ラジオ・コメディア杉並

そうすると簡単にいえば、モグラ叩
きのように、あっちでもこっちでも沢
山の放送局ができて、それらの放送局
がいろんなかたちで今回のことをとり
あげてくれたらいいなということだ
か？

津野海太郎

まア、そうですね。向こうが「一罰
百戒」をねらっているんだとしたら、
ちょっと引くふりをして情勢を見ると
か、そういう押しついたり引いたり力関
係についてのセンスをきたえる、いい
チャンスでもあるんじゃないかと……。

ラジオ・コメディア杉並

以前、やはりぼくらのまわりで起き
た大麻の事件が、新聞報道などでこれ
とおなじような取りあげ方をされた
と思うんです。それで今日は特別に小室
等さんにきていただきました。(笑)
あなたもミニFM局が若者の心をむし
ばんでいる、社会に害悪を流している
かのような報道のされ方なんですけれ
ども、ラジオ・コメディアで番組もも
っていらっしゃる小室さんに、ちょこ
っと……。

小室等

なんで大麻でぼくなのかと思っ
たんですけど(笑)……大麻からつなげる
のはむずかしいから、これはちょっと
おいておいて、ぼくは既成のラジオ局
で仕事をもっているという立場から話

したいと思うんです。

ぼくを感じていうと、むかしは民放
局のほうがNHKより圧倒的におもし
ろい番組をつくってたと思うんですけ
ど、いまはそうじゃないですね。もち
ろんNHKにはつまらないものもある
けど、おもしろいものも民放よりNH
Kにあるという気がする。民放局とい
うのは、なんでだか知らないけれど
管理がきついんですね。ディレクター
やプロデューサーも自主規制してい
て、わけのわからないスポンサー・サ
イドの意向にそって番組をつくる。こ
とを起こさない。スポンサー・サイド
からクレームがついて責任をとらされ、
左遷されるようなことは絶対にしない。
そういうなかで番組がつくられている
から、おもしろいはずがない。ぼく自
身、おれはおもしろい番組をやっ
てないなということを感じなければなら
ない悲しい場面が、いつもあるわけ

すね。

ところが自由ラジオになると、そう
いうくだらない規制がない。それがラ
ジオ本来のおもしろさなんだと思っ
ていたわけですよ。そしたら、そうい
うステキな場所だなアと思ってた矢先
に、この事件でしょ？

電波条例の範囲に入らない電波のと
ばし方で、ぼくら、とりあえずやって
るはずですよ。それがこんどの事件
によって、自由ラジオというものに、
世間さまに顔向けができないことを日
陰でコソコソやってるんだというイメ
ージを与えられる。だけど、ぼくは既
成のラジオ局じゃないとこでやれると
いうたのしみを奪われかねないとい
うことで非常に不当に感じているし、も
し世間さまが自由ラジオをおかしな眼
で見るとすれば、やっぱりそれは正し
ておきたい。こういう微弱電波では
しているかぎり、ぼくがやろうと、ぼ

くもほぼ無名に近いけれども、ま
ったく無名の人やろうと、文部大臣がや
ろうと、これはまったく法にふれない
わけですよ。

ぼくら歌の世界では、放送倫理に
ふれるような言葉をつかったりすると、
すぐ放送禁止とか発売禁止になる。か
つてぼくらが子どものころには日常の
なかにあふれていたような言葉でも、
それが倫理規定にひっかかるとすぐ禁
止になるんですね。

で、谷川俊太郎さんといっしょに歌
をつくってるときに、谷川さんの詩の
なかに「親っていいのは自分の子ども
のまえに立つとメクラになってしまう」
という意味の表現があったね、当然、
これは発売禁止・放送禁止になるであ
ろうという予測があったわけです。そ
したら谷川さんが、「いいよ、小室く
ん、やろうよ。こんどはぼくもやるか
ら」と——つまり、もし放送禁止・発

売禁止みたいな事態になったら、ぼくはぼくですれに対してたたかいたを挑むといったんです。で、発売になって、こっちは逆に手ぐすねひいて待っていたんだけど、結局、ノー・クレームだった。「要注意曲」という指定はされたわけ。放送局にいくとそういう表があった、そこにはのってるんだけど、禁止にはならなかった。

だけどノー・クレームなんてことは、どう考えてもありえないんですね、ぼくらがもってるデータのなかでは。つまり、それは谷川俊太郎さんだからなのね。谷川さんは教科書なんかにもしょっちゅうでてくるステータスのある人だと。そういう人の作品にクレームをつける、いろいろややこしいと。それは谷川さんが権威であったということなんだろうね。あるいは権力的一端を谷川さんが担っていたということかもしれない。

じゃあ、あまり時間がありませんけど、粉川さん、最後に……。

粉川哲夫

今回の摘発で、もうミニFMができなくなるとは思わないかと悲観的な考え方をもってる人もいると思うんですよね。でもミニFMっていうのは、やっぱり自由ラジオなわけです。自由ラジオの日本におけるスタイルとか方法だと思っんです。その場合、重要なのは人間関係であって技術じゃないんだよね。

ミニFMになにか新しいところがあるとすれば、そこにあつまって、それをやっている人たちの人間関係がいままでとはちがってきたということでしょう？ その関係を生かした表現というのは別の方法でもできるんですよ。た

そのことをこんどのことと重ねあわせてみると、とてもおもしろい。つまり、だれかが傷つけられたわけでもない、だれかが被害をこうむったわけでもないんだけど、どこかにそれを管理していかうとする力があって、しかも、谷川さんのような人だとなにもいわないのに、おなじことを一介の名もない人間がやるとクレームをつけてくる。ヘンな話だけれども、仮に谷川俊太郎さんが自由ラジオをやっている、ちょっとぐらい微弱電波をオーバーしたとしても、たぶんクレームはつかなかっただろうと思っんです。そういうふうには天秤にかけられて逮捕されたものを、世間の眼がいがわしいものとして見るような仕方では伝言されることを、とても不当に思っね。ちょっと長くなりましたけど……。

ラジオ・コメディア杉並

KYFM局の廃墟で

柳田克さんの話を聞いた

たとえば地域の二〇〇メートル、三〇〇メートル・エリアのなかに電灯線をおして、それでラジオのネットワークを組むことだってできるんですよ。津野さんと「これが自由ラジオだ」という本をつくったときも、場合によっては微弱電波をつかえなくなるような状態がすぐでてくるかもしれない、その場合にはこういうこともできるんじゃないかと、いくつかオプションを考えたことがあるんです。だから、もしこの摘発で悲観的になった人がいたら、そんな必要はないんだといいたいですね。いろんな方法があるんですよ。

ラジオ・コメディア杉並

わかりました。じゃあ、これで今日の特別番組を終わりたいと思います。みなさん、ありがとうございます。

てきたのかな。それで昨日（九月二十八日）の午後、粉川哲夫といっしょに会いにいった。

田町から慶応大学正門のまえを通りすぎて、つぎの角を左にまがってすぐのところ——大通りに面して小さなビルがあって、その一階が柳田さんの経営する「アワハウス」という貸しスタジオになっている。ガラス扉を押して入ると、そこが廊下みたい狭いロビー兼事務室。そこから木のハシゴ段での

ぼったところが中二階の物置になって、その三畳ほどの部屋を「KYFM放送局」として使っていたらしい。機材はまだ検事局にいたままになってるとかで、ぼくらが見せてもらったときはカラッポだった。

九月四日の夜、柳田さんは二人の間とガラス扉のすぐそばにあるソファで話をしていたんだって。そしたら突然、ガラス扉の外がパッと明るくなって、それと同時に二十人ぐらの男たちがなだれこんできた。せまいところだから、連中、あっとい間に奥の壁につきあたってしまっ、身動きできない状態で「柳田はどこだ！」と大声で連呼したらしい。なにがなんだかわかんない。で、「ハイ、私です」と手をあげたら、そのまま逮捕された。

かれの話をきくと、新聞報道がいかにでたらめだったかということが、よくわかる。

料理もそうだし、あと腐敗物をつかったメタン・ガスとか人力飛行機とか、自分の実験経験をラジオで流していたらしい。だから若者のDJごっこというよりも、「KYFM放送局」の本体はやっぱり地域局なんだよ。地域局がつぶされた。なのに、そういう報道は一つもなかったからね。

柳田さんは明治の理工科で電波物理をやった。町の科学者としての柳田さんの眼から見ると、一〇〇メートル、十五マイクロボルトという微弱電場の規定そのものが、きわめて非科学的なあいまいなものらしい。しかも測定が極度にむずかしい。

だから自分の電波は法律の範囲を超えているだろうと漠然と思っているのがせいぜいで、正確なことはだれにもわかるはずがないんだ。だからこそ電場管理局はすぐ警察に逮捕を要請したりするのはなく、まず当事者に警告

おれはあのととき旅行から帰ってきたばかりで、新聞を読んでなかった。そこに粉川さんから電話がかかって、それではじめて事件を知ったんだよ。新聞を見て、「とうとうはじめやがったな」と思うと同時に、「KYFM放送局」については、たぶん、いい気なミニFM局がなにも考えずに、とんでもなく強力な電波をとばしてたんだろうという印象をうけた。ほかのラジオ局の人たちも、おなじように感じたみたいだね。その新聞報道でつくられた第一印象が、ラジオ・コメディア局の特別番組にも影響を与えてると思う。

発信機の出力は、たしかに二・五ワットあったらしいが、それがアンテナにいくまでに減衰して、アンテナ出力は〇・四ワット。それでも違法にはちがいないが、通常の三百倍などというバカなことではない。それやこれやで警察ではだいたい科学論争をやったそう

を発する義務がある。したがって、もし自分の電波出力に不安をいだいている局があるとすれば、十回でも二十回でも、どんどん電波管理局に調査をとめたほうがいいというのが柳田さんの意見だった。これはいい忠告だとおれは思ったね。われわれが調査をもとめても、管理する側が、いそがしいとかなんとかいってそれに応じなかったら、そのままつづける。それでも警察が踏みこんできたら、それは電波管理局の責任ということになるんだからさ。ホントにやってみるといい。

柳田さんの考えとしては、一地域に一局ずつ、おおよげに放送の権利を割りあてるべきだという。そのさい、電波というのはむずかしいものだから、一局に一人は専門の知識や技術をもった人を用意すべきだとお。

かれからこういう意見をきくとおは、正直いって考えていなかった。全国に

だが、刑事たちに知識がなく、いちいち電波管理局と電話してたしかめるのだから、いっこうにラチがあかない。おまけに家宅捜査のとき、アンテナのコードを切断してしまったので、正確な数字がでてこない。そんなの、まるで証拠隠滅じゃないか。

放送大学の電波を妨害したという報道もあったけど、それは、もっと強力なほかのラジオ局が、「KYFM」の番組を中継して、それが混信したものだっらしい。ぜんぶでたらめ。直接の被害者なんて一人もいないんだ。

それからマスコミ報道は、この事件を芸能人の大麻スキヤンダルみたいなものにしたてあげようとしていたと思う。ところが柳田さん自身の放送というのは、むしろ地域ニュースとか料理メモとか、そういうのが主体だったんだよね。かれは愉快な人で、なにか新しいものをつくるのが大好きなんだ。

一〇〇〇ぐらいあるミニFM局のなかには、かれよりもラディカルな考え方をしているところが、いくつもあるだろう。つまり柳田さんは堅実な夢想家なんだよ。だからこそ、なぜ警察がこういう人を見せしめの対象にえらんのか、そのあたりがまた不思議に思えてくるんだね。しかも地元の三田署ではなく、警視庁保安第一課。「これはお前が考えてるよりも、ずっと重い犯罪なんだぞ」とさんざんやられたらしい。仮起訴で二〇万円の罰金。罰金刑としては最高額にちかい。

つかまって三日間は仕事や家族のことを考えて、メシがのどをとおらなかつたという。でも出てきたら、近所のおばあちゃんが「ご災難でしたね」といってくれたそう。ミニFM局を大麻化しようとする警察や新聞の意図は、そのかぎりでは失敗に終わったということかな。

(津野海太郎)

キリコのコリクツ



玖保キリコ

最初、私は「ショートケーキ」のことを書く予定だった。

気が変わったのだ。

何故、気が変わったのかという理由を説明することにする。

今日、私は某白泉社の某ララ編集部で、旅行前の最後の仕事をせっせとしていた。翌日、私はニューヨークへ飛

ぶのである。

「明日はニューヨークの空の下だ」というウキウキした思いと、

「出発ギリギリまで仕事しなくちゃいけないなんて（この後には水牛通信の原稿も書かなきゃいけない）」というメソメソした気持と、

「それというのもの、無計画に遊びまわっていた私が、やっぱりいけない」という反省が、ごちゃごちゃに混じり合った状態にしては、けっこう気楽に私は仕事を進めていた。

その時、某まんが家のアシスタントが原稿を届けに編集部に入ってきたのだが、彼女は原稿を渡すと、次に、「刺されたので、救急箱を貸してください」と言うのだ。

「ハチにでも刺されたのだろうか」と私は思った。まわりにいた人もそう思った。

違った。

彼女は虫に刺されたのではなく、人に刺されたのであった。タクシーを降りた時に、近寄ってきた男に、スカートの上からナイフで切りつけられたのだそう。びっくりしてしまっ、顔もよく見ていないらしい。

私は、物騒な世の中だ、と思うのと同時に、私が彼女だったらどうしただろうかと想定し始めた。

私が彼女だったら、強気で追いかけていってつかまえようとするだろうか。いやいや、相手は刃物を持っているのだ。つかまえようなんて甘い考えだ。私は刃物を持った人間に直面した時の恐ろしさを知っている。私は刃物を持ったチンピラにからまれたことがあったのだ。

思い出した。あれは恐かった。というわけで、頭の中が「ショートケーキ」から「チンピラと刃物」の方

に切り変わってしまった。

以上が「理由」である。

それは数年前のことであった。

私は、ある駅で西武池袋線の上り電車に乗った。すでに帰宅ラッシュの時刻は過ぎていて、その電車は空いていた。特に、私の乗った車両はガラガラだった。

「良かった。座れる」

と思ったが、何故か席が空いているのに立っている人も、ちらほらといた。私は「れ？」と思いながらも深く考えずに、やたらいちゃいちゃしているカッブルの横にぼんと腰をおろした。

私は日頃から、自分は電車に乗るときに注意が足りないと思っっている。

つまり、電車に乗るとき瞬間の観察がうまくできずに、日の当たる側に座ってしまうとか、座ってみて初めて恐ろしい臭いを放つ浮浪者の存在に気

づくとかいったことが、ままあるのだ。

この時もそうだった。

よく見もしないで席を選んだのが、間違いの元であった。

カッブルだと思っていたのが、カッブルではなかったのだ。その様子から察するに、いやがる女性に男がからんでいたのだ。

私は素早く「これは、席を変えたほうが賢明だな」と判断し、即実行した。判断は正しかったのだが、普段のモグサが災いした。私の移動先が、彼らから3メートルと離れていなかったのだ。

男は私のおおざっぱな移動に気づくと、その矛先を私に替えた。

「何で逃げるんだよ」

と彼は、私ににじりよってくる。

年齢は20代後半。髪は変な茶色に染められており、そのことと服装から堅気でないことがありありとわかる。

加えて、酔っている。

「うわー、いかにもチンピラ」

などとぼーっと思いつつ、やはりこの状況から脱出しなければならぬと決意を固めていると、彼は再び同じセリフを繰り返した。

「何で逃げんだよ」

彼の口許はにやにやしているが、目は笑っていない。恐いよー。

私は持ち得る以上の威厳を込めて、思いつきりつーんとそっぽを向いた。それが、彼のカンにさわったらしい。彼はむっとしたように

「何だよ」

と言っ、懐からボンナイフを取り出したのだ。

あの、小学校の頃にエンピツを削るのに使ったかわいらしいナイフである。そのかわいらしいナイフが、今、凶器として、私に向けられている。顔は女の命。

どうにかしなければならぬと、必死に考える私の頭に浮かんだのは、あの有名な「弱い犬は目を見れば逃げる」という言葉だった。

ワラをもつかむ気持で、私はこの言葉を実行に移した。
じっ。

おかしい。きかないらしい。正義は必ず勝つはずなのに。にらみ方が足りないのかもしれない。そうだ。もう一度にらんでみよう。
じっ。

やはり、きかないらしい。きかないどころか、彼はボンナイフをびらんびらんさせて追ってくる。

私は悟った。この方法は間違っているのだ。次の瞬間、逃げていったのは弱い犬の彼ではなく、私であった。

水牛かたより情報

●先月号で「工房訪問」をした藤本和子さん、デイヴィッド・グッドマンさんの出版されている著作を紹介しておく。まず、藤本さん。「砂漠の教室 イスラエル通信」河出書房新社。「塩を食う女たち 闘書・北米の黒人女性」晶文社。「ペルーからきた私の娘」晶文社。翻訳のなかでは、リチャード・ブローティガンのもので「アメリカの鱒釣り」他7冊。マキシン・ホン・キングストン「チャイナタウンの女武者」と「アメリカの中国人」(2冊とも晶文社)それから、編集のしごととして「女たちの同時代 北米黒人女性作家選」全7冊、朝日新聞社。この7冊は本のうつくしさといい、藤本さん

彼はおもしろがって、やはりボンナイフをびらんびらんさせて、私を追ってくる。私は、当然、おもしろくはない。必死である。

私は車両中をばたばたと逃げながら思った。

「こういう時、誰も助けてくれないっていうけど本当だな」

「今この瞬間、私は世間の冷たさを、身をもって知っているのだ」

「逃げながらも、こんなことを考えてるなんて、ゆとりじゃないか」

このような切羽詰まった状態で、だからとしようもないことを考えるのも脳が必死になって、私の体験の中であらゆるデータから、何か助かる手段を見つけようとしているからなのだろう。本当にあんな短い時間の中であれだけ多くのことを考えられたものだと後で思った。

で、私の脳はその手段を見つけた。

の解説を読んで感じるなにかこれまでにないまなざしといい、依然としてわたしには特別なものだ。

デイヴィッドさん。「逃亡師」晶文社。「イスラエル 顔と声」朝日新聞社。

「富士山見えたか」白水社。3冊とも日本語で書かれたもの。(八巻)

●「ワープロは現代のガリ版か？ ミニコミとワープロ、あるいは表現者とコンピュータ」10月27日(日)2時〜7時。すぺーす・しょう中野堂03・389・0536 五百円。問合わせ 模索舎03・352・3557
安くなりミニコミ界にも進出著しいワープロ。私たちの「武器」がふえたと喜ぶか、コンピュータ社会の末端と警戒するか、まずはざっくりばらんな話の場を！ (模索舎)

●柳生まち子「おしゃれな生活絵本

私は車両を替えた。

次の車両までは、彼も追ってはこなかった。それでも、まだ安心できなくて、私は走りに行って、気がついたときには、一番後ろの車両にいた。

とにかく、私は貴重な体験をしたのだと思う。

「弱い犬は目を見れば逃げる」という言葉はあてにならないということを知ったのだから。

逃げるのが一番。目を見るとかみつかれる。

しかし、私は長い間、この言葉を信じ続けてきたので、非常に裏切られた気がした。

そういう言葉は、他にももっとあるに違いない。気をつけよう。ぶつぶち。

私はこの方法を本物の犬に対しても試みてみたが、やはりきかなかった。

夢をそだてる日のおはなし」(じゃこめてい出版 一〇〇円)中味百二十ページの半分はカラーです。永遠の少女たちに、現役の少女たちに、たのしんでもらえる絵とおはなしのかわいい本です。水牛通信にのつけた「子どもたち」もはいています。(まち子)

●三宅榛名+高橋悠治DUOコンサート 10月26日(金)岡山(連絡0862・72・7090)27日(土)熊本・同仁堂(連絡096・343・1213)11月4日(月)2時、八尾西武ホール(0729・97・0111内線359)7日(木)7時TAKKE・OFF7(ゲスト エリオット・シャープ)(03・476・5297)8日(金)松本・音楽文化ホール(連絡0263・46・0096)9日(土)静岡すみや駅前店(0542・54・2311)(高橋)

料理がすべて？

田川律

まいった。

締切りの日、いや。日「どころか、あと数時間、という頃になって、書くべき暮しをしていないのに思い至ってぶぜんとしている。つまり、この一月ほど、ほとんど料理をしていない。主婦、あるいはそれに相当する役割をしている人にすれば、そんな暮しをしているわけではないのだが、ひとり暮らしの気楽さのせいで、忙しくなるとつい、その部分を省略してしまう。

ぼくの爪より柔らかいようだった。そのⅢ。吉祥寺の斉藤晴彦さんのうちへ深夜、海ちゃん(津野)と訪ねて小さな煮干しをフライパンでいった。ホントは七味唐辛子を入れたかったがなかったの、しょう油だけだった。

そのかわり、といっているのはなんだが、ひとが作ってくれたおいしいご馳走にありついた。その最大のもは、日音協の事務局の矢部さんが、「バゴン・ブカス・コンサート」の打ち合わせの時に、フィリピンの人や、多摩じまみや、コンサートのスタッフのために作ってくれたもの。

栗ごはん。栗とうすあげをメインに炊き込んだもの。そういえば、昨年、大阪の友人が栗を送ってくれた時は、ばくも栗ごはんを炊こうと思ひ、まず栗をゆでたら、そのあまりのおいしさに、栗だけさささと食べ、同居人の大

この一カ月、全部外食をしていたのか、と思うといささかゾツとする。おまけに、ひとのうちへ出かけて「まかしときなさい」というチャンスもなかった。

毎朝コーヒーを入れて、パンを焼いて、そのまま出掛けたら、夜遅くまで帰らない日々が続いていたわけだ。情ないこっちゃ。

それでも、少しはやったかな、と思つて手帳を眺めてみると、——といつて、そこに毎日の食事の内容が書かれているわけではないが——貧しい記憶がよみがえる。

そのⅠ。帯広の「ふるさと十勝」が「エル・パソ」という手造りソーセージの店からソーセージを送ってきてくれたので、それを何度かカンタンに料理して食べた。ここのソーセージは、五月に水牛楽団とNOISEで旅した時に、一度しっかり食べさせてもらっ

谷くんとふたりで「素材のおいしいものは、そのまま食べるのが一番」と勝手な理屈をつけていた。

栗とトリのたき合わせ。これもその時やるつもりで、栗だけ食べてやれなかった。

ナスの煮びたし。丸ごとのナスを、ゴマ油でいため、しょう油を主体にしただしにつけたもの。柔らかくてとてもおいしかった。

ほかに、おでんもあつたが、この時をほかで食べてきたため、おでんを食べるほどの余裕がなかった。

この間、もっともよくお世話になったレストランは、朝日新聞社の食堂。多くの会社の社員食堂と同様、ここもけつておいしいといえないのだが、毎日のメニューの多様さには、いつも感心させられる。利用者の数はわからないが、少くとも二十品ほどの料理が

たが、何種類もあつて、それぞれにおいしい。生のものがあつて、これは一番おいしいのだが、いつも向うで食べる時は料理してあるのだが、今回はどうしていいやら、と思つてまず、ゆでて食べた。でも、これはギョーザを焼く要領で、フライパンに油を引いて焼く方がいいとあとで教えてもらつてそうしたら、そっちの方がやはり断然おいしかった。ともかく、一袋に五本入っているのを、朝半分食べて、帰ってからまた半分食べるという日を三日間ぐらひ続けた。

そのⅡ。冷凍花咲ガニを、ジャンジャンの友だちのつれ合いが、築地の食品会社につとめているのでもらった。太い脚ばかりだったが、机の上に数時間おいて、これも四国徳島に実家のある友人にもらつたスグチをたっぷりかけて食べた。固い殻を破るのにはぼくの足の爪を切るペンチを使った。

毎日あり、作る側になれば、これだけのものを、選び、量をきめるのがとても大変だろうとひとごとながら心配してしまふ。毎日食べる人の数は違うだろうし、ひと月の間でも、その数は上下するだろう。給料日のあと数日は、目だつてこの社員食堂へ来る人の数がへつているのがわかるほどなのだから。とまあ、ひとの苦勞の心配ばかりしながら過ごしていったとは、情けない。

これからは気候も涼しくなるし、クーラーのないわがアパートへ遊びに来てもらつても、暑すぎることはないしせいせい機会を作つて、貧しくない、情けない生活をするように心がけなくては。

鎌田慧

スの老婦人が、夜の散歩でたち寄ったモスクで、ガンジス河に眼を凝らすところがいい。静かに流れるガンジス河の暗闇で、むくりと水面がもちあがる鱗である。それが、これからはじまるであろう事件を予感させる。

老婦人は、そこでインドの青年医師と出会う。彼女はロンドンから息子の許婚者とやってきたのだが、映画はこの三人の心理的すれ違い、つまりは植民地のインド人と支配者イギリス人とのデイスコミュニケーションをテーマにしているようである。

この映画をみながら、わたしは北朝鮮でみた映画を想いだしていた。日本人の専横に抵抗する朝鮮人医師が主人公で、題名もストーリーイもはやさだかではないのだが、街並みを表すセットに、「仁丹」と「わかもと」の看板が掲げられているのが妙に生々しく、植民地朝鮮の時代を表現しているよう

に思えたのだった。スーパリーがないので、付き添っていた通訳が、同時通訳をしたのだが、五十前後の彼の声が次第に涙声になるのを聞いて、日本と朝鮮の関係を、映画によってよりもさらによく理解させられたのである。

「インドへの道」に登場するふたりのイギリス人は、善意あふるる女性であり、インドの青年は彼女たちに彼の能力以上の期待をする。それが裏目に出て、若い娘の意識の水面下にあったインドへの恐怖が、不意に頭をもたげて善意のコミュニケーションが断ち切られ、その裂け目にイギリスとインドの関係が、というより関係の不成立が姿をあらわす。

そこまではいいのだが、わたしが不満だったのは、画面に登場するインド人たち、たとえば裁判所を取りかこんだ群衆などが、いわばウズウムゾウとしてしか描かれていないことである。

デビット・リーンへの期待は、風景への描写にある。「アラビアのローレンス」での、気の遠くなるような砂漠のロングショットや「ドクトル・ジバコ」の、シャンデリアから垂れさがったツララが、吹きこんだ風を受けてキンコンカンコンと鳴り響くシーンなどそれだけみせてもらうだけでも、お釣りはいらぬ、というような気分にはさせられたのだ。「インドへの道」では、この国に着いたばかりのイギリ

彼らにむけられるカメラは冷たく、路傍の石ころ同然である。インドは、表情をもって登場するインテリともいえる青年医師ひとりだけであらわされ、あとの大衆たちはいちべつだに与えられていないことに、この映画の「良心的苦悶」がよく示されている。

それとくらべてみると、「火山のもとで」のジョン・ヒューストンは、はるかに人間好きのようである。

ファーストシーンは、ボサダの絵などでよく知られている「死者の日の祭り」で、道傍の屋台や墓地にしゃがんでいるメキシコ人の表情は輝いていてデビット・リーンの眼よりもダイナミックである。ふらふら歩いてあらわれる「酔いどれ天使」は、タキシード姿の領事（アルバート・フィニー）である。アップが足元を捉えると、靴下なしの素足。この天衣無縫の酔っぱらいは、呑んだくれすぎで妻にも去られ、

領事も解任されたばかり。登場してから、翌朝、息を引き取るまで、グラスを手放すことはない。テキーラ、メスカル（地獄の酒）、ホワイトホース、シーバス、ジョニ黒と産地や国籍にこだわることなく、ポイと喉の奥に流しこむ。

そしてあっけなく殺されてしまうのだが、銃口をむけられても、たじろぐことなくよくたちむかい、蜂の巣にさされて篠つく雨の泥寧に横たわって、最期の一言。

「なんて薄汚い死に方だ！」
メキシコに死ぬイギリス人の自己批判である。

ジョン・ヒューストンは、デビット・リーンのように、両国の理解などに頭を悩ませてはいない。あっさり射ち殺され、泥まみれになって谷底に蹴落とされる栄光のイギリスを当然のものとしてしている。それは、アンドレ・カイ

ヤットの、アラブ人とフランス人の不倶戴天の関係を描いた「眼には眼を」を想起させてすがすがしい。

はたして、これから、フィリピン人やタイ人に殺される進出日本人の姿がこれほど乾いたタッチで描かれることがあるだろうか。

シーズンがはじまっている。コンサートはきくのではなく、自分で演奏していくものになった。10枚ちかく買ったり、もらったレコードのなかで2度きいたものについてかくよりないだろう。ともだちのやっていることについて客観的になれるともおもえないが、いま音楽のなかでおもしろいことがあるとすれば、それは自分でやっているか、おそかれはやかれ友人となるだけかがやっていることだからしかたがない。最前線にいる自覚なしにしごとができない、まだ。

●橋本一子「Beauty」
ル・クレジオの小説にでてくるナジャジャをタイトルにした曲をききたくて買った。かわいい歌なのにストリングスの音がはいったアレンジで残念。ほかの曲もレコードではごきれいにまとめられていて、童画風だったりイベルみたいな音のイメージが先立っているような気がする。ステージではそんなイメージからはみだしたところがあって、ヴォーカルやギタープレイなど、おもしろく見ているが、そういうのは商品にはならないのかもね。

●坂本龍一「Steppin' into Asia」と「エスベラント」
前のはこの頃ラジオからよくきこえてくる。タイ語のラップと英語の歌のどちらもどこか日本的で、両方ともエキゾティックなものをあらわしている

のだろう。東南アジアにむかう日航機のなかで観光客がゆめみる幻想のアジア、というような映画のシーンをおもいうかべてしまった。アメリカにもなりきれず、アジアの端にあってもアジアではない日本人の孤独感というものが、世界で一番エキゾティックな感情かもしれないな。

「エスベラント」でもそうだが、このエキゾティックな孤立がどうしてもでてしまうのが16ビートを新幹線なみの律儀さでぎざんであるリズムにちがいない。ニューヨークの16にもバリ島の16にもアフリカの16にもなれないが、いっしょうけんめいそがしくどこかにむかって小走りだ。「エスベラント」のビートのない部分のミニマル風のくりかえしのゆらぎの方にかえてかかるやかな瞬間がある。ふつういわれるダンスアルバムではない舞の感覚。
ここにもでてくるが、メタリックな

音は流行らしい。鉄も文明から文化の段階にはいったか、とおもう間もなく流行に消費されてしまうのだ。

YMOと水牛楽団はたしか同年に出発した。今かれらはエスノ・ハイテクとか都市エスノの方向に行く。ここでもすれちがいだ。もっとも、水牛はエスニックであったこともないし、ハイテクにもならないだろう、ということが今になって自分でもだんだんわかってきた。いつまでたっても左手は右手のしていることをしらない。

●「Gada FOR NOW」

女一人、男二人のトリオが朗読するフリーゴー・バルとクルト・シュヴァイツターの詩がいい。無意味なシラブルの破壊力をすなおに信じていられた時代がよみがえる。チューリヒの孤立からうまれた幻想のアフリカだ。キャバレ・ヴォルテールのばかさわざをじっ

さいに見たのは少数だった。トリスタン・ツアラもレーニンもだれにもしられずおなじ通りをあるいていた。だれにもしられず、時代をふきとばすほどの暴力がしずかにそだった。
それにくらべてイタリア未来派にはじめから日あたりのいい土地でそのまま枯れてしまったようなところがあつた。さて今は――。

●「カラワン」(あたらしいカセット)
カラワンのカセットのタイトルはいつも「カラワン」。最初に元・喜納昌吉、今スワミ・ブレム・ウパニシャッド作「花」のタイ語版がある。ここで口うつしで覚えていった節まわしもタイ風が変わっている。「ボクペク」ということばあそびのある歌。シンセサイザーやモンコンが買っていたおもちやのようなドラムマシンもおもいがけないところで顔をだす。「ぼくは民

衆」、「ぼくは花」というタイトル。スラチャイの顔をおもいうかべて、相당한自信だな、とおもう。「ヒロシマ」や「メイド・イン・シャパン」のように向う側から見ると日本は、よくもわるくもこちらの想像をこえたところかたのしい。かれらの日本滞在日記もきれいなちいさい本になった。おどろくようなことがたくさんかいてあるにちがいない、かんちがいもふくめて。

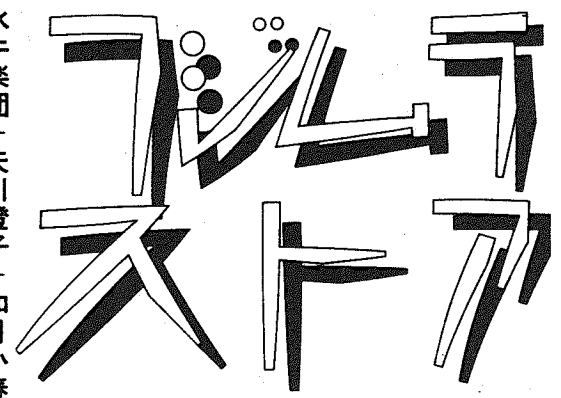
こういう音楽にであうと、日本からアジアを見る目はどうしても何かにとらわれている、とおもってしまう。手づくりの楽器と中古のシンセサイザーがいっしょにきこえてきても、エスノだハイテクだ、という前に、かぎられた手段をうまくつかっていることに感心する。それは本の印刷でもおなじだが、かれらの方がよほどゆとりのあるように見える。ここ落日の文化には試行錯誤の時間さえのこっていない。

編集後記

今月号の締め切りのあとに、「電波法違反」で逮捕されていたKYFM局の柳田克さんと会うことができたので、津野海太郎の演劇時評のページは柳田さんのはなしにふりかえた。今月は芝居を三つも観たのになあ、と少々残念そう。でも、すぐに次の号がくるからね。

10月2日、中野文化センターでの「パゴン・ブカス」コンサートに水牛楽団も出演した。「パゴン・ブカス」とはタガログ語で、あたらしい明日の意。フィリピンから来たデサとボールのふたりのバンド名でもある。目的意識のたいへんはつきりした、しかもきちんとしたかれらの歌をはじめ聴いて、カラワンとはずいぶんちがうなあと思った。じっさいにちがいを知ると、第三世界という言葉でいっしょにくくってしまふのはなんだかおおざっぱなことと思えてくる。

最近「水牛通信」の名前を新聞などで見ることがあって、編集委員はなんとなく顔がほころびがち。ミニコミとしてみとめられるのに七年かかったということか。(八巻)



水牛楽団十矢川澄子十如月小春
定価二三〇〇円(送料サードピス)
夜遣いの曲 しずくの曲 祖母
のうた 最後のノート だるま
さん千字文 ワルシャワ労働歌
花巻農学校精神歌 ボクハン
ンケイスル 都市 ★編集部あ
て郵便振替で申し込んで下さい

*予約購読の申し込みと送金は郵便振替を利用してください。

口座名 水牛編集委員会
口座番号 東京四一九一七九二
購読料 一年分三〇〇〇円(送料共)
住所、氏名、電話番号、何号からと明記。
*本誌は次の書店にあります。

模索舎(新宿) ☎三五二一三五五七
ブックイン(阿佐谷) ☎三三三〇一七八九七
信愛書店(西荻窪) ☎三三三三四九六一
ワンラブブックス(下北沢) ☎四一一八三〇二

アール・ヴィヴァン(西武池袋店12F)
カンカンポア(西武渋谷店B館B1)
ストアデイズ(六本木ウエイブ4F)
名古屋ウニタ書店 ☎七三二一一三八〇

水牛通信 第七巻第十号 一九八五年
十月十日 定価二〇〇円 発行人 堀田
正彦 発行所 水牛編集委員会 ☎〇三
東京都世田谷区新町2-15-3 八巻方
電話〇三(四二五) 九六五八 振替口座
東京四一九一七九二 印刷所 ㈱トライ
プリントショップ